

白雲片片

第九回

皮肉骨髓

今回は達磨大師と、その法を嗣いだ道副大師、尼総持大師、道育大師、慧可大師といった四人の弟子が登場する古則を紹介致します。

正法眼蔵三百則 第二百一則

『挙す、菩提達磨尊者、将に西天に帰るんとして、門人に謂いて云く、时将に至りなんとす、汝等蓋んぞ所得を言わざる。門人道副云く、吾が所見の如きは、文字に執せず、文字を離れず、而も道用

を為す。師云く、汝、吾が皮を得たり。

尼総持云く、吾が今の所解の如きは、慶

喜の阿闍佉国を見るに、一たび見て再

び見ざるが如し。師云く、汝、吾が肉を

得たり。道育云く、四大は本と空にして、

五陰は有に非ず、而も吾が見処は、一法

として得可き無し。師云く、汝、吾が骨

を得たり。最後に慧可、出でて礼拝して

後、位に依つて立つ。師云く、汝、吾が

髓を得たり。是に於いて法を伝え衣を付

す。』

現代語訳／「師」は達磨大師、「副」は道副大師、「尼」は尼総持大師、「育」は道育大師。「挙す」は、昔の話を取り上げる場合に用いる言葉です。

菩提達磨大師が、現在の中国から西のインドの方へ帰ろうとして、弟子たちに言った（実際は、インドへ帰ろうとしたというよりも、自分の死期が近づいたこ

とを感じた）。

師「いよいよ私も死ぬ時が近づいたよう

だ。お前たちが修行によって得たと

ころを言ってみろ。」

副「私が仏道修行によって得たところの

ものは、文字に固執するわけでもな

く、かといって文字を嫌ってそこか

ら離れるわけでもございません。そ

して日常生活の中で、真実の働きを

しております。」

師「お前は私の皮を得た。」

尼「阿難陀尊者（慶喜）は一度は理想を

描き、それを達成するために努力し

ましたが、それを乗り越えた後は、

二度と理想の世界を求めることが

ございませんでした。私が仏道修行

によって得たところのものはそれ

と同じようなものです。」

師「お前は私の肉を得た。」

育「この世の中を構成しているといわれ

る地（固体）、水（液体）、火（炎）、

風（気体）の四種類の物質の要素は、

元々は絶対的な存在ではなく、色

（姿・形）、受（感覚）、想（思考）、

行（行為）、識（意識）という、こ

の世の中を客観的に捉えた場合の

五種類の集合体も絶対の存在では

「ごさいません。そして、私が仏道修行によって今日持っている見方としては、この宇宙の中には言葉によって表現できるものは何一つございませぬ。」

師「お前は私の骨を得た。」
最後に慧可大師が進み出て達磨大師に礼拝し、自分の席に戻って叉手を立てた。

師「お前は私の髓を得た。」
その結果、達磨大師は弟子たちに釈尊の教えを伝え、お袈裟を与えた。

最初の道副大師は、文字、理論について所見を述べておられます。文字、理論は便利ですが、それは自分の指針とし、学ぶ上での助けとなるべきものであつて、理論さえ分かればそれで良いわけでもなく、それに溺れるようなことがあつてはなりません。

次の尼総持大師は、阿難陀尊者の逸話を引用し、人が自分の理想に迷うことに關して所見を述べておられます。阿闍国というのは理想世界のことです。恐らく、尼総持大師自身が理想を描き、それが原因で困つた経験があつたのではな

いでしょうか。自分勝手に描いた理想を追い求めたり、懂れてはならないと述べておられます。ただ、人は何もかも行き当たりばったりで生きるわけにはいきませぬから、現実に即した目標や計画をも否定しておられるわけではございませぬ。

次の道育大師は、確かにこの世の中は物質で構成されているけれども、それら一切が絶対的存在ではなく、流動的だと述べておられます。道育大師の意見には、物質にこだわり過ぎないことが大事であり、かといつて物質から離れてこの世が存在するわけではないという主張が込められているように感じます。

最後の慧可大師は黙つて礼拝し、退いて立たれましたが、これによつて私たち

が送る日常生活の中での動作、行いを表現され、日常生活を除いて仏道は有り得ないと主張されています。仏の教えというのと、一般の方が日常で行うこととは別次元のことで、普通の人間には到底真似ができません。昔から勘違いされてきた経緯がありますが、日常の生活を送る以外にすることがない私たちが、日常生活に關係がない教えをいくら学んでもそれは役に立ちませぬ。

道元禪師はこの古則について、和文の正法眼蔵葛藤の巻の中で、達磨大師の四人の弟子の中で特に誰が優れていたのかという解釈をするべきではなく、四人とも真実に適つた所見を達磨大師に呈した、というふうを示しておられます。

この古則の中には坐禪という言葉は出てきませんが、端坐を貫いた達磨大師の法嗣の四大師の主張は、全て坐禪の体験から出てきたことは間違いないでしょう。／参考文献・西嶋和夫著「真字正法眼蔵下巻一」、「現代語訳正法眼蔵第七巻」

